

浅野水法の白山社と「芝馬祭」について

吉田 光良

芝馬祭の舞台となる白山社は国道 155 号線と県道 153 号線（浅井清須線）が交わる浅野の白山交差点の西北にある。芝馬祭でいう「浅野水法」は地名ではなく、白山社の氏子が住んでいる町内の名前で、字名としての「水法」は確かに存在するが、「水法町内」に含まれる字名の 1 つに過ぎない。ちなみに白山社は字「白山」に鎮座している。

芝馬祭は昭和 59 年に愛知県の無形民俗文化財に指定された。小学生男児が境内と水法町内を芝馬を引いて回り、最後は水法川に流す珍しい祭である。

（白山社）

祭神は白山総本社に同じく、イザナギ（伊弉諾尊）、イザナミ（伊弉冉尊）の争いを仲裁したとされる菊理姫命である。

現在は狭くなっているが、かつての白山社の境内地は 4,000 m² 余もあり、大樹が生い茂り昼なお暗く近寄りがたく、夜中に通行すれば大杉の上で火をたき、又は大勢雷のごとくどっと笑うなど通行人の魂を奪ったと伝えられている。境内には浅野長政公お手植えとされる「めおと杉」や、浅野長勲候（大正 2 年 10 月 24 日に参詣）、浅野長之候（同 8 年 4 月 13 日参詣）、令弟浅野養長候（同 9 年 10 月 10 日参詣）各々お手植えの木があったが昭和 34 年の伊勢湾台風でことごとく倒壊した。境内地の整備に伴い、昭和 55 年に巨木だった「めおと杉」の切り株を掘り出し、現在地に移して祀った。

（祭礼日）

八朔、すなわち旧暦の 8 月 1 日（新暦の 8 月 25 日～9 月 23 日頃）に定められている。

(祭の由来)

鎌倉時代の弘安4年(1281年)に再び蒙古の大軍が日本に押し寄せてきた。弘安の役と称される元寇である。この時、閏7月1日に「神風」が起り蒙古軍の船団は荒波に翻弄されて沈没、これを契機に神国日本に勝利がもたらされた。人々は国を挙げて神々の凱旋を祝い迎えた。浅野水法村でも、氏子の童男童女が時あたかも刈っていた芝草で御神馬を作り、大神の御帰還を迎えて踊った。この遺風が「芝馬祭」であるといわれる。

なお、閏7月とはその年には7月が2回あって、2回目の7月1日に神風が吹いたということである。それでは毎年は祝えぬということから8月1日になったようだ。

(芝馬作り)

氏子の童達が清浄な長い芝草(茅ちがや)を刈り集めて揃えておけば、年行司が祭り当日神前に集まり、馬の形に似せて頭・口を芝草で編み、胴は芝を藤づるで縛り、足は木の枝を4本、眉毛は赤唐辛子、眼はほうずき、とうもろこしを陰茎・陰毛に使い、陰のうはなす加子二つを用いて芝馬を作る。(現在では、多少作成方法が異なっている面がある)

(運用)

出来上がった芝馬に数多くの縄を付け、子供たちは各々一筋の縄を持って、ワッショイワッショイと境内を引き回して神前に供える。その後、町内を引き回わる。こうして氏子の家々を回れば、各戸喜び迎えて祝儀を与え、年内無事に災難を免れると言い伝えられている。子供たちは、芝馬の綱にとまれば健康に育つといわれ、元気いっぱいであそびまわる。氏子各戸を回り終えると、芝馬を水法川(新般若用水)に流して夕暮れに祭りは終わる。このようなほほえましい祭りが730年以上も続いているのは大変珍しい。

※ 芝馬祭保存会のホームページを右記からご覧になれます。 www.shibauma.org/